



# 小説の未来 (2)

---

## 小説と料理

---

春日信彦

---

## プロとアマにどんな違いがありますか？

読者は、小説を読む時にどのようなことを作品に期待するのでしょうか？小説は、あくまでも娯楽の一つですから、読者は小説に娯楽の提供を期待すると思われれます。小説から学問的知識を得ることができる場合もありますが、これは、むしろ例外であって、一般的には、小説は読者に娯楽を与える娯楽本と言えるでしょう。そこで、プロの作家は読者を喜ばすために工夫を凝らすわけです。言い換えれば、読者を楽ませる工夫ができる、販売部数を増やすことができる作家がプロです。

小説にはいろんな分野がありますが、市販されている作品に共通する点は、読者が喜ぶような内容が展開されているということです。もし、非常に哲学的で正義について考えさせる作品があるとします。その内容に価値があると一部の読者が認めても、ちっとも面白くない、という噂が流れた場合、その作品の販売部数は伸びないでしょう。そこで、プロの作家は、多くの読者を獲得するために読者を楽ませるための内容を書くのです。

プロの作家は、自分のためはもとより出版社のためにも、たくさん売れる作品を書く努力をします。今、「愛」をテーマに書く場合、異性愛、同性愛、親子愛、兄弟愛、等いろんな角度からとらえた愛をドラマ展開していきます。金儲けを考えなければ、作家は真摯に考えた内容の作品を書くでしょうが、金儲けという、出版社のためという、多くの読者を獲得しなければならないという、これらの条件が加わると読者ウケする工夫が凝らされた作品が生まれるのです。

プロは、このことは当然のこととして作品作りをするのですが、アマは、出版社のためにというような条件に縛られることはないので、自由奔放に自分の思いに従って作品作りができます。個人的には、本来、小説はビジネスとは関係なく書かれるべきだと思っています。でも、ほとんどの小説は、読者のために書かれるものですから、少なからず読者を喜ばす内容が含まれる必要があると思われます。

きっと、賞を取りたくてひたすらウケ狙いの作品を書いているアマは多いと思われます。これはこれで、プロを目指しているわけですから、いいのではないのでしょうか。また、アマの中には、創作に生きがいを感じて、受賞とかウケを考えずにわが道を行くという方もいるのではないのでしょうか。いずれにしても、アマは自由奔放に“わが道を行く”という特権を持っていると言えるのかもしれませんが。

最初にテーマを設定するのですか？

私の場合、概念的なテーマから具体的なテーマへと変化していく場合が多いと思います。たとえば、「愛」をテーマとして、ドラマ展開していくうちに、異性愛であったり、同性愛だったり、兄弟愛だったりと変化していくのです。「愛」の人間関係は、無限に広がっていきます。この無限に広がっていく「愛」の世界から、自分なりの小さな愛の世界を描写していくことになります。

「ありふれた殺人」「蜜の罠」などは、同性愛が展開されていますし、「見えない子供たち」「長生きしてね」などでは姉弟愛、「恋占い」では兄妹愛が展開されています。おそらく、どんな作品でも人間関係を描く場合「愛」を抜きに書くことはできないでしょう。また、「愛」を中心に人間関係が描かれるからこそ、読者はドキドキ、ハラハラ、ワクワクするのではないのでしょうか？多くの読者は、「愛」のドラマ展開に喜びを感じるのではないかと思います。

当然、いろんなテーマがありますが、私の場合、大きなテーマとして、「愛」「家族」「国家」「戦争」「犯罪」などがあります。「犯罪」をテーマとしたものに、「地下室の妖気」「老婆の一撃」などがあります。「地下室の妖気」は、メチル水銀を含んだ廃液を無処理で水俣湾に流し、そのことによって水俣病を引き起こした企業の犯罪について、「老婆の一撃」では、血友病患者への非加熱製剤投与によって、エイズ患者を増加させた製薬会社の犯罪について書いてみました。

具体的なテーマは、無限にあると言えますし、同じテーマでも作家によって全く違った作品が出来上がる事でしょう。「謎解き」をテーマとした当初から計算された小説もあります。刑事や探偵が殺人事件を解決する推理小説です。この手の作品では、登場人物やアリバイ工作や殺人方法に工夫が凝らされ、さらに読者を迷路に誘い込むような罠も仕掛けられていて、読者は刑事や探偵と一緒になぞ解きを楽しみます。

## 多くの取材は必要ですか？

取材にもいろいろありますが、ノンフィクション小説を書くうえでは、多くの取材は欠かせないでしょう。でも、フィクションを書くのであれば、取材をしてもその取材した内容の使い方が違ってきます。「母性の罪」では、姫島で起きた事件を書いたわけですが、姫島で起きた事実の事件を書いたのではありません。孤島という個性を利用した架空の事件を創造し、日常では味わうことができない情動を読者に与えるわけです。

はっきりわかりませんが、多くの作家はなんらかの取材をしているのではないかと思います。でも、その目的は、小説を書くうえでその内容を参考にするということであって、取材した内容をそのまま書くということではありません。私の場合、取材で得た見聞から思いもよらないヒントが得られることがあります。誰しも先入観というものがありますから、取材することによって、目から鱗が落ちる、ということがあるわけです。

軍人とか原発労働者になったの実体験取材は、知識と感性を豊富にします。そして、体験を豊富にすることは、小説を書くうえで役に立つように思われます。でも、体験が豊富になったからと言って、小説が書けるわけではありません。確かに、体験はドラマ展開に役立ちますが、フィクション小説は自分の体験を書くのではないのです。前述したように自分の心を見つめることが大切で、自分の心をしっかり見つめることができるようになって初めて、自分の体験が作品に生かされてくるのです。

なるべくありのままに自分の実体験を書く私小説では、自分をしっかり見つめることになるので、最初に私小説を書かれるのもいいかもしれません。小説を書くうえで大切なことは、体験したことをしっかり見つめ、自分の個性をさらけ出すことです。作者の個性が、オリジナルな作品を生み出す原動力になると思っています。作品作りには、テクニック以上に作者の心が大切だと思います。

作家としての心構えみたいなものはありますか？

これから、たくさん小説を書きたいと思っておられる方への助言ですが、最初からテーマを決め、ドラマ展開を考え、傑作を書くぞと意気込むのも結構ですが、自分の内面を見つめながら自分なりの“おいしい料理”を作る気持ちで書かれてはいかがでしょうか？私は、お客さんに賞味していただく料理を作るような気持ちで小説を書いています。自分の書いた小説をおいしいと思う方もいれば、まずいと思われる方もいるわけです。

前述したように、小説は料理のようなものではないかと思っています。同じ豚骨ラーメンでも作る人によって味は変わります。同じ殺人事件を扱った推理小説でも殺人方法の工夫や登場人物の言葉遣いによって、作品の味がガラッと変わってきます。やはり、小説の味は、作者の全人格が醸し出されると考えた方がいいと思います。小説という料理は、書き手の味がにじみ出るわけですから、自分という個性にこだわって、オリジナルな作品に挑戦していただきたいと思います。

ラーメンでも、みそラーメンが大好きだという方もいれば、豚骨ラーメンが大好きだという方がいるわけですから、料理人は自分が得意とするラーメンを提供し、お客様に賞味していただければいいのではないかと思います。小説にも同じようなことが言えると思うので、作家は自分が得意とする作品をたくさん書いて、多くの方に読んでいただき、いろんな批評を得ることが大切ではないかと思います。

陳腐な言い方ですが、小説も「量から質」ではないでしょうか。たくさん書いて多くの批判を受けて、少しずつ質が向上すると考えればいいと思います。最初から読者を満足させられる作品は、そう簡単にはできないと思います。根気良く、自分の心や性格を見つめ、じっくりと作品作りに取り組んでいただきたいと思います。真摯に自分を見つめて書かれた作品は、読者を感動させられると思います。

インターネットが情報ツールの中核をなし、さらに人間以上の知能を持つAIが登場するに至った現在、賞、俳優、TV、マスコミなどを利用し、販売部数を一時的に増やすやり方は、やむをえないのかもしれませんが、でも、小説を書くということは、読者に“生きる喜びと感動”を与えるものであってほしいと思います。最近、市販作品にウケ狙いに終始した作品が増えているように見受けられますが、このような傾向は、作家の質を低下させるのではないかと懸念しています。

出来れば、これから作家を志す方たちは、単にウケを狙った作品を書くのではなく、自分の心と対峙し、自分に対する厳しい目を持ち、じっくりと「自然と人間」を見つめて作品作りに取り組んでほしいと思います。小説を書いて金儲けをしたいという思いで書くこともそれなりの価値があるので、金儲け作品を否定しているわけではありません。畢竟、芸術作品の価値は、未来も含めた人類が決定するものだと思っています。

絵画、彫刻、陶芸、作曲、作詞、アニメ、など芸術作品は、多々あるでしょう。芸術作品の価値とは、いったいどんなもののでしょうか？私の個人的な見解ですが、芸術作品には、すべてそれなりの価値があると考えています。プロの作品には多くの読者を獲得できるような価値があり、アマの作品にも書き手の個性が現れているわけですから、それなりの価値があると思います。素直な目を持った子供が描いた絵も、打算的な心を持った大人が描いた絵も、それなりの価値があるのではないのでしょうか。

技術的に稚拙な小学生が書いた小説でも、大人には見えなかった世界を表現していれば、それなりの価値があると思います。つまり、価値は、作品に触れたその人が決めるものだと思います。だからこそ、アマは、たくさんの作品を作り、多くの人たちから評価されるべきだと思っています。個人的には、アマの作品は、100の作品の内1つでも評価されればいいと思います。“小説家を志す”ということは、地図もない、ゴールも見えない無限の宇宙へ旅立つようなものではないのでしょうか。

おそらく、プロの小説家になれる人は、ほんの一握りで、しかも、歴史に残るような作家は、プロの中のさらに一握りではないでしょうか。そのようなことを考えれば、貧乏生活しながら小説家を目指すなんて馬鹿げていると思われるでしょうが、前述したように、作品の価値は作品に触れた人が決めるのです。アマの作品であっても、作品の価値を認めてくれる人が一人でもいたなら、その作品に費やした努力と時間は、無駄ではないと思います。

アマの作品でも、いったん生み出された作品は、それなりの生命を持ち続けると思っています。アマだから、プロだから、という気持ちは捨てて、作品のために情熱を傾けていただきたいと思います。小説家を志し、誰からも評価されず挫折される方は多いと思いますが、認められることにこだわらず、命ある限り、創作に取り組んでほしいと思います。「作品」は永遠に生き続ける「命」だと思います。焦らず、驕らず、未来を見つめて、お互い頑張りましょう。